

判官と新撰組

——武士に求められた警察としての職能——

呉 念 聖

武士は日本の象徴である。武士は、世界の謎でもある。

古今東西、武力に訴えた国争いは数知れず、軍事政権も決して珍しくなかった。しかし、日本のように、武士階級と称されたものが、七百年近くも実質的に日本の国政を司っていた、——その間、数度の戦争による交代もあったが——という例はほかに皆無である。中世ヨーロッパには、騎士がいる。日本の武士を語る際、この騎士はよく引き合いに出され、比較対象されるが、しかし騎士は、階級として呼ばれることがあっても、いわゆる騎士政権を立てたことはない。

武士はいったい何者だ。なぜ武士は日本史上長期にわたって存在し、しかもかつて支配階級として振る舞っていたのか。歴史が武士を生み、武士もまた歴史をつくり、物語をつくり、いまなお日本社会に大きな影響を及ぼしている。それゆえに、方々から注目されているのである。

武士に対して、外国人は、刀を帯び、華麗な甲冑を身にまとい、ちょんまげを結った姿で、忠義のために、簡単に人を殺し、または切腹自尽してしまうといった漠然としたイメージをもっている。

わたしも外国人の一人であるが、いま日本に住み、毎日日本人と同じ空気を吸っている。わたしは、上記のような漠然としたイメージを超えるべく、武士の謎に挑戦しつづけてきた。本論において、判官、赤穂浪士、新撰組にまつわる武士の物語を通して、警察として振る舞う武士像の樹立における武士（物語のヒーロー）と民衆（物語の享受者）との関係を探求してみたい。少しでも謎の解明に役立とうと思うのは、わたしは武士が好きであるからのだ。

判官の活躍

中世軍記物語においては、判官の活躍がかなり目を引く。たとえば、保元元年（一一五六）に起きた保元の乱を描いた『保元物語』には、次の一節がある。

去二日より入あつまれるつわものども、みちもさりあへずらうぜきなるよし聞えければ、まつ洛中の騒動をしづめんが為に、同五日少納言入道信西宣旨をうけたまわつて、検非違使等をめして、関々をかたむべきよしおほせくだす。宇治路をば安藝判官基盛、淀路をば周防判官季実、山崎をば隱岐判官惟繁、大江山をば新平判官資経、粟田口をば宗判官資行、久々目路をば平判官實俊、各々宣旨にしたがつて、関々へこそむかはれけれ。

都の治安維持のためには名目で、実は後白河天皇側が先手を打って敵の動きを封じようと、検非違使庁の判官を多数出動させたのである。

基盛は安芸守平清盛の次男。保元の乱の前哨戦において、大和国から上京し、敵の陣営に加勢しようとした源親治を生け捕りにし、殊勲を立てた。季実は周防守源季範の子。百余騎を率いて保元の乱の本戦つまり白河殿合戦に参加

し、乱後も宇治橋の守備をし、処刑や首実検の実行役を務め、さらに敵の大將源為朝の護送にもあたった。

後白河天皇軍が出撃するところに、「陸奥新判官義康百餘騎」⁽³⁾との文が見られる。この源義康こそ足利氏の祖といわれた人物である。文中、義康は白河殿合戦でどう戦ったかは見当たらないが、乱後の論功行賞で昇殿をゆるされたという内容がある。その点から推測すると義康はかなり活躍したように思われる。また、敵陣営の重要な武将平家弘とその三人の息子の処刑実行役を務めたという記述もある。

以上は、すべて金刀比羅本『保元物語』による。古活字本には、後白河天皇軍に「出羽判官光信、進藤判官助経」など、判官職のつく他の武士の名が見られる。⁽⁴⁾

いっぽう、対立する崇徳院側軍の総大將は源為義で、彼もまた六条判官と呼ばれた人物である。六条は為義邸の所在地で、判官は彼のかつて勤めた職である。というのは、保元の乱が起きる二年前、為義は息子為朝の九州濫行のために、責任をとらされ、免職されたのである。ただし、彼は二度にわたり、計二十年以上も検非違使の尉つまり判官のポストについていた（一一二三～一一三六年／二八／四一歳、一一四六～一一五四年／五一／五九歳）。保元の乱のとき、為義はすでに六一歳、最初は出仕するつもりはなかったが、崇徳院側の藤原頼長からの再三の要請で、最終的に彼は源氏棟梁としてのプライドと家の未来を賭けて参戦した。けっきょく、敗れてしかも息子義朝の手によって斬首された。金刀比羅本『保元物語』中では、「判官」という言葉は四五回使われているが、そのうち二五回が為義をさすものである。為義は、この物語の中でもっとも紙幅を割かれている悲運な人物といえる。

ただ、「検非違使の大尉に任ぜられた久安二年（一一四六年、為義時に五一歳）以後の為義は官位こそ低けれ、武士の棟梁として威を張るに好適な位置に自ら置き、上級貴族に対して容易に膝を屈することがない独往の姿勢を保ち得た。」⁽⁵⁾というような分析もある。つまり歴史的にみて、為義はそれなりに自分の棟梁としての役命を果たし、プラ

イドを保つことができたともいえる。また、ここでの為義分析を通して、判官職の重要性を覗い知ることでもできよう。

広い意味では判官は大宝（養老）令による四部官の三等官である判官（じょう）をさす⁽⁶⁾。ただ、軍記物語の中で判官とのみいったときは、検非違使の太少尉に限る。普通、大尉は、坂上、中原両家の人が代々任じ、おもに司法を担当する。少尉は源平以下の武士がなり、警察役を果たす。

検非違使の尉の本官は衛門尉である。つまり、検非違使庁は衛門府とは密接な関係をもっている。そもそも衛門府は皇居の外側を守備し、検非違使庁は都全般の治安を担当するが、両者のもつ役命の間に境界線は必ずしも明確ではない。衛門府の別名は靱負府という。また検非違使庁も靱負の庁という別名がつく。

実は検非違使は令外官である。検非違使庁は嵯峨天皇の世、承和元年（八一六）に設立され、その後、職権がしだいに巨大化していく。清和天皇の世（八五八―八七六）に入って、ついに衛府の追捕、弾正台（唐名は御史台）の糾弾、刑部省の裁断、左右京職の訴訟等の諸権がみな検非違使庁に帰し、その後、鎌倉幕府が成立するまで、検非違使庁は司法警察権を一手に握り、国家枢要の機関として存在していた。

飯田悠紀子氏が指摘したように、「院政期には、中央・地方に台頭してきた武士が、検非違使の尉クラスに任命されることが多く、京中の治安維持においても、とくにこれら尉クラスの武士の働きが大きく、また逆に武士の方も、この官を利用して自分の地位確立をはかったのである⁽⁷⁾」。つまり、平安末期、判官は武士の出世コースのポイントとなっていた。その上、官階が五位に昇れば、大夫と称され、上級役人の仲間入りをする。さらに受領でも命じられれば、一国の国守となり、経済力もつく。

『保元物語』以外のいくつかの軍記作品にも、「判官」という言葉が頻繁に登場している。たとえば、『平家物語』

には二二一回、『義経記』には三〇二回も使われている。『平家物語』中、「判官」と称されたものは、源氏は義経、兼綱、季貞、義清、康国、光長、平氏は康頼、知康、資行、盛国、長綱、藤原氏は忠綱、師経、景高などがある。中でも断トツ一位は、一二七回の源九郎判官義経である。

義経と判官びいき

今でも「判官」といえば、日本人なら誰でも源義経を連想するだろう。「義経物語」のもとには『平家物語』であり、『義経記』である。もっとも『義経記』はいわば義経の個人史であるから、「判官」の使用数三〇二回の中、二九五回を占めているのも当然といえる。

近世に入って判官物が大流行り、義経はついに日本の国民的な英雄になり、義経への同情心から「判官びいき」という日本語が生まれた。そして、この「判官」に、弱い人、弱い自分を投影させようとする傾向すら見られる。たとえば高橋富雄氏は「判官びいき」を「正しくてしかも世にいられない弱者に対する同情を、義経について典型化した国民感情」だと解説している。

しかし、わたしはかねがね「判官びいき」を安易に「弱者への同情」とすることには反対である。⁽⁹⁾そもそも義経は弱者であろうか。敗れた義経は弱いといわれても仕方がないという一面も確かにあるが、だからといって義経は弱者だと結論付けるのは少々短絡的ではないかと思う。義経に同情が寄せられたのは、彼は間違いなく強い一面を有するからである。義経の物語は、貴種流離譚だけではなく、無敵英雄譚でもある。義経は何度も激しい戦に勝利を収め、大将として卓越な才能を発揮しており、また武蔵坊弁慶との戦いなどにみられるようにその非凡な武芸は他の追随を許さない。勝ってもおかしくないそのような人物が、けっきょく、負けてしまった。強弱は相対論で勝負は結果論で

ある。そういう意味で、私は、「判官びいき」を「敗者への同情」としてとらえたい。山田宗睦氏は「政治的敗者への同情」⁽¹⁰⁾と解釈しているが、わたしは、純粹に勝負の角度からもう少し言葉を足して「勝利可能な敗者への同情」と表現したいと思う。

「勝利可能」という点をとくに強調したい。それが万世一系の天皇王権下で、非凡な才能を有し、かつ貴種であり、判官（武士がつく他の軍事職も含める）だからこそ可能である。いや、そうでなければ不可能であったといったほうがよからう。

義経は悲劇的な英雄として広く認知されている。無論、この点は、彼が優れた戦略家として多くの勝ち戦をしたという実績に裏付けられている。では、彼に活躍の場を与えてくれたきっかけは何であろうか。もし頼朝の挙兵がなければ、義経は歴史の表舞台に出ることもなかっただろう。そして何よりも、京都での活躍が義経を英雄として天下を知らしめる第一歩となる。⁽¹¹⁾「義経の歴史は都で育ち、畿内で展開する。義経は都の人になることによって、はじめて歴史上の人となる。」⁽¹²⁾都で、義経は後白河院に判官という公職を任されたからこそ、自在に能力を発揮できたのだという点に注目されたい。まさにそのとき、「源九郎判官義経」という英雄が生まれたのである。

しかし、判官であれば、みなひいきの対象になったかというところではない。たとえば、前に取り上げた義経の祖父六条判官為義について、その一生の物語を通覧すれば、同情心こそわくものの、ひいきするまでの気持ちは醸成されない。理由は比較単純で、義経のようなめざましい活躍をすることはなかったからである。言い方を換えれば、義経のようにその活躍が文学などによって伝えられることがなかったからである。

忠臣蔵と法の番人

判官びいきの判官はわがヒーローであり、判官びいきのひいきは単なる同情ではなく同情・憧憬・尊敬などの複雑な気持ちである。

山田宗睦氏はこう書いている。

日本と日本人について、柳田国男は一方で文化の均霑、他方で一種の事大主義をあげたことがある。おおむね時の実権に一種の事大主義で従いながら、他方でその実権者に敗れたものに限りない同情を寄せることで、社会心理的には権力のシェアをちぢめる。これが判官びいきのもとにある。

「忠臣蔵」は、じっさいの赤穂事件とは別に、江戸時代の庶民がつくりだした判官びいきの所産であった。この忠臣蔵がいまそろそろ現代日本人の多数派（戦後生まれ）の好みからズレ落ちはじめている。ということは、判官びいきの社会心理的な根拠がなくなったということなのか。こんどはそれをたしかめたい。⁽¹²⁾

「忠臣蔵」は日本人の好みからズレ落ちはじめているかどうかについての議論は別の機会に譲ろう。ここでは、まず山田・柳田観を視座に、「忠臣蔵」物語におけるひいきという社会心理を探ってみよう。

赤穂藩は藩主が腹を切られ、藩が取り潰され、いわゆる「喧嘩両成敗」ではなく、「喧嘩一成敗」という最悪の結果になった。本来なら、この不公平を作り出したのは幕府である。不満は幕府に向けられても不思議ではないと思われるが、最高権力者への事大主義のせいか、代わりに不満のはけ口を探さねばならない。そこで、刃傷事件でまっ

たく咎められなかった吉良が敵役とされた。あるいは、吉良を敵役にするしかなかったといったほうがよい。けっきよく、仇討ちが成功し、吉良の首を取った。つまり、赤穂浪士が武を以て悪を成敗した。どれほど悪かは問題ではない。要は、意気揚々の権力者をやっつけ、鬱憤を晴らしたい。ポイントは仇討ちの成功である。庶民は、成功しなければ、気が晴れないのである。赤穂浪士全員切腹したことに目が行きがちであるが、仇討ちの結果が出なければ、死はある意味で大死になってしまう。実際、大石内蔵助も、当時の江戸の庶民もこう考えていたのではないか。

赤穂浪士と同時代人の山本常朝氏は「圖にはづれて死にたらば、大死氣違なり。恥にはならず。」⁽¹³⁾という。さらに「浅野浪人夜討も、泉岳寺にて腹切らぬが越度なり。又主を討たせて、敵を討つ事延々なり。」⁽¹⁴⁾といつて赤穂浪士を批判し、武士としては、復讐するには策を弄せず、即実行し、また討入りを果たせばすぐに切腹すべきだと力説している。

わたしは、真の武士道はなにか、討入りの理屈をどうつけるかは、所詮武士の論理であって、大衆の人気を左右する決定的な要素にはなり得ないと見ている。重要なのは、ここで、吉良を悪い権力者（あるいは権力者＝悪）の象徴と見なし、赤穂浪士を自分に代わって悪を懲らしめる英雄として見立てるといふ群衆心理が働いていると思う。そのとき、大衆の気持ちは法をやぶってもかまわず、テロリスト的な行為をしても許すというようなものだ。⁽¹⁵⁾民衆は権力者に服従し、その権勢を羨望する反面、不満不平・恨み・妬みを抱き、心底のどこかで権力者の失態や失脚を期待し、それを目にすれば喜ぶというような複雑な心理状態を有する。赤穂浪士は武士である。武士なら、武を以て天皇を守り、将軍を守り、ひいては民を守ることを天職とする。吉良を討つ行為もこの原則に背かず、決して天皇や将軍に反対するものではなく、また一般の百姓に被害を与えることでもなく、あくまでも武士内部のルールに則った、なかば、将軍からも黙認された仇討ちである。そういう意味で、赤穂浪士が法の番人なのだ。

赤穂浪士の全員切腹は一種の後日譚である。確かに、権力者に抹殺されることはいっそう浪士を昇華させ、英雄にたらしめたという効用はあった。しかし、もっとも大衆をわくわくさせたのは吉良の首を取れるかどうかという点であろう。吉良の首を取った瞬間、赤穂浪士の勝利に喜び、われが権力者に勝ったという嬉しさにもかられたにちがいない。

ここで、「忠臣蔵」に関する、ちょっと刺激的観点をもつ中国人研究者（ジャーナリストか）の論文を紹介したい。題は「文学と日本の国民性」で計三節ある。その第一節のタイトルは「戦前国民の間にあったヒステリックな感情が日本文学を深淵に引きずり落とした」で、中にこのような論述が展開されている。

日本にはさまざまな芸術手段を使って十七世紀後期に起きた「四十七人の浪人」事件を懸命に表現しようとした芸術家が多かった。……この実際に起きた事件は封建社会における日本武士の理想を具現したと思われるがゆえ、小説・映画・芝居化され、一世を風靡し、しかも「理想に献身する」という日本武士道精神の中で、もっとも素晴らしい手本として広く伝えられてきた。日本社会は長年鎖国状態を続け、軍事国家として八百年近くの伝統を有し、このような武士道精神の影響や刺激を受けた結果、日本民族の中に固有する狭隘で閉鎖的心理にヒステリーに近い熱狂が加わったことになる。よって、十八世紀以降の日本はずっと不穏な状態であった。⁽¹⁷⁾

理想のために己を捨てることは美德というべきであろう。だから、おそらく論者が問題視しているのは理想の中身だと思われる。ただ、わたしの興味をひくのは「日本民族の中に本来あった狭隘で閉鎖的心理状態にさらにヒステリーに近い熱狂が加わった」の中の「ヒステリーに近い熱狂」という形容である。

ひいきという心理は今日の、「めちゃくちゃ好き」というほど、熱狂的なファンの気持ちに通底するのであろう。ファンがもつ好きな気持ち、つまりひいきは、無原則といえば無原則なものとなろう。追っかけなどの行為は、ファンでない人からみればヒステリーのようにも見える。このような「ヒステリー」はわが中国の文化大革命中も蔓延していた。むろん、そのときの崇拜対象は、赤穂浪士のような武士ではなく、歌アイドルでもなく、毛沢東であった。

特別警備隊——新撰組

大衆人気という点では、新撰組は赤穂浪士に比肩できよう。

司馬遼太郎氏は、「兩人ともその最期はみごとだった。武士にაცოგელატかれたかれらは、事実、日本最後の武士として、武士らしく死んだ。男として、やはり幸福な生涯だったといえる。」⁽¹⁸⁾といい、近藤と土方の二人に「ラストサムライ」というような賛辞を送った。

人気の理由について、尾崎秀樹氏は「彼らにステータスなものへの夢があったことは疑えない。それだけに徳川家に殉じるかたちとなり、その悲劇性を倍増させた」、「尊王一辺倒だった戦時中においても、近藤勇や土方歳三は変わらない人気を保ちつづけた。一種の判官びいきが作用したためでもあるが、いずれにせよ大衆の間に語りつづけられた新撰組の印象は、歴史家の評価とは異なった像を結んだといえる。」⁽¹⁹⁾と分析している。

なるほど、滅んでいく徳川家に殉じたヒーローに同情が注がれるか。同じ幕末、凄腕の剣士といわれた、土佐の岡田以蔵、薩摩の田中新兵衛、大和十津川の浦啓輔、肥後の河上彦斎（あの人気漫画の主人公、流浪人剣心のモデルとされた人物）等はどこらかいえば、みな革新側にいた人間である。人気の原因は、政治信条ではなく、ひたむきな姿によるようだ。もう少し詳しくいえば、どんな信念をもっているかより、とにかく自分の信ずる道をひたすら突き進

み、阻むものを倒し、世を揺るがすほどの実績を作り出したにもかかわらず、生前にはあまり評価されなかったというような人物が日本人に好まれるようである。

服部之総氏は、「この日（池田屋事件）以後近藤勇の新撰組には、攘夷遷延のゆえに幕府当路を責めることよりもなによりも、さしあたり第一、「尊攘」実践のための第一前件と考えられた公武合体そのものを死をもって護る使命が課せられた。それはさしづめ「長州」の、やがては「薩長」のくらやみの使徒にたいして現制度を死守する、特別警備隊の仕事であった。ブルジョア的要素に一筋の連結を持たぬ、多摩農村の封建的根底部分を百パーセント武装化した、試衛館独裁下の新撰組ほど、この任務のために不敵、真剣、精励たりうるものがおよそ他に考えられようか。」と分析している。進歩史観からみれば新撰組はまちがいなく反動的な組織になる。役割という点においては、まさに氏のいうように、新撰組は一種の特別警備隊の仕事をしていたのだ。

新撰組物語の源泉は新撰組が活躍した事実である。新撰組が京都で行った取締りは京都のみならず、日本全土を震撼させた。その行為を可能にしたのは、新撰組が特別警備隊として幕府から任されたからである。

ただ、司馬氏の筆によれば、近藤と土方は自分たちが警察として見られるのが嫌っていたようである。『燃えよ剣』の中、池田屋事件の後、幕府はご褒美として近藤勇に与力上席というポストを与えようとしたところ、次の文が綴られている。

（土方）「与力なんぞ、ばかっている」

たしかにばかっている。与力というのは直参にはちがいないが、元来の素性は地付役人で一代限り。しかも將軍に拝謁の資格のない下士で、御家人並である。その上、捕物専門職で、軍役の義務がなく、武家社会から「不淨役

人」として軽蔑された。軍人ではなく純警察官であると思えば、遠くない。

幕府は、新撰組を警察官とみた。近藤にすれば、片腹いたかったろう。

近藤は、志士をもって任じている。新撰組の最終目標は、攘夷にあるとしている。本心は別として、それは何度も内外に明示している。いわば、軍人の集団なのだ。

近藤と歳三の、事件後の最大の不愉快は、幕府から、警察官としてしかみられなかったことだろう。評価が、小さい。⁽²¹⁾

いっぽう、司馬氏が、別の文章の中で、「百姓あがりの近藤、土方が」「出身についての劣等感があっただけに、必要以上に士道的な美意識をこの二人はもっていた。」「新撰組の隊士は、近藤、土方だけでなく、みな武士になりたがった。その希望を一剣にかけてかれらは集まってきた。あわよくば旗本になれる、と考えていた。旗本こそは、薩長などの陪臣とはちがい、武家のなかの武家であった。新撰組の異常なエネルギーの根源には、こういうひそかな期待があったのではないか。」⁽²²⁾とも書いている。

そもそも武士は、天皇や公卿のボディガードとして王権を守り、反乱を鎮めるために歴史の表舞台に登場したのであった。のちに、繰り返された熾烈な合戦が軍人としての武士の役割を突出させた時期もあったが、武家政権の安定期に入ってから、戦がめっきり減り、武を表現する仕事はまたほとんど治安だけになった。たしかに、文治政府の中、治安は政府の夥しい仕事の一部に過ぎず、その位置づけもそう高くない。そこで「百姓あがりの」近藤勇や土方歳三(『燃えよ剣』の中の近藤・土方)の、戦闘に従事する軍人としての武士が真の武士であって、治安に当たる警察としての武士は一段格下だという誤解が生じた。京都治安を任された新撰組は、本来京都治安を担当する会津藩の

藩士ではなく、また幕府直属の旗本でもない。新撰組は一種の、非常期の超法規的な組織である。こういうような警察組織があつてからこそ、「百姓あがりの」近藤、土方らが縦横無尽に大暴れることができたのである。⁽²³⁾

警察と民衆

物語の中、日本の英雄はほとんどが武士である。武士とは現代流でいえば職業軍人である。軍人が軍隊の一員であるように、武士も必ずやある武士団に属し、武士政権誕生の後、將軍または大名に仕え、ある組織のあるポストにつくことになる。野武士、浪人といわれる武士は最初からそうであつたというわけがないはずだ。しかし、英雄視された武士は、どうも野武士や浪人的な要素が強く、超組織的な存在として描かれ、アウトロー、反体制的な色彩をまといっている。果たしてほんとうにそうであつただろうか。

大津雄一氏の答えはノーである。彼は「〈王権への反逆者の物語〉とは〈王権の絶対性の物語〉にはかならない。」と論断し、「軍記が、衆の発想によつて支えられているということは認めてもよい。しかし、肝心なのは、個も衆も、等しくイデオロギーによつて支配されているのであり、衆になんらかの優越性も存在しえないということである。」「変革」は、共同体を否定しないという限定付きの「変革」であるはずだ。そのような錯誤に気づかず、「変革」の担い手である「叛逆英雄」をほめたたえることは、極めて危険である。」と指摘している。たいへん鋭い分析だと思ふ。

軍記物語などの文学作品における人物造型理念について、わたしはかつて次の意見を述べたことがある。「いつの時代も上流階級の振る舞いは世間に注目され、とくに一般の人々の憧憬であり、手本となる。」「時は前へ進むがしかし人間はどうも振る舞いの規範を過去に求める傾向がある。ただ、その過去に対する憧憬には、実は現在の、自分が

属する階級か階層の振る舞いや習性も混ざっている。新旧価値観が混ざり合う状態の中で時代は少しずつ前進していく。人物造型にもそのような多重的な要素が見られる。⁽²⁵⁾「この考えはいまも変わらない。」

おもうに、中国も同様である。封建王朝の易姓革命に武力を訴えることは、封建王朝そのものを否定するのではない。黄巾の乱をきっかけに立ち上がり、漢王朝のために忠誠を尽くそうと宣言する劉備、関羽、張飛はそうであり、『三国志演義』、宋王朝の腐敗を根本原因としながらも各々やむを得ない個人的な事情に迫られて梁山泊に行き、造反軍に入ったが、最終的には帰順の道を選び、朝廷の「犬」になった梁山泊百八人の好漢もそうである（『水滸伝』⁽²⁶⁾）。しかしながら、これらの物語や物語の英雄からは、やはり大衆のにおい、時代の新風が感じとることができる。

英雄の多くが武将であったという点においては、中国は日本とあまり変わらない。しかし中国には、ほとんどの武将を含む士大夫階級というカテゴリーは認められるが、日本のような、武の仕事に専念する武士階級が存在というような認識はない。

階級の意味について、『大辞林』の一部の釈意を引用させていただく。一つは「生産手段や生産から得る利益などに関して対立する関係にある社会的集団。封建制下の領主と農奴、資本主義社会における資本家と労働者など。無産」であり、一つは「一定の社会で、身分・職業・学歴・財産などを同じくする人々によって形成される集団。階層。中流」知識」である。

前者の規定により、平安期においては貴族対武士、近世に入っては農工商対武士という対立構図の中で、武士を階級として捉えることができよう。このように対立する階級が存在する社会を階級社会といい、英語では「a hierarchical society」という。しかし、後者の規定に準すれば、武士の中にヒエラルヒー構造の存在することも明らかである。つまり武士内部にも多重階級が存在している。階級は一定ではなく、何通りの意味ももっているのだ。

『岩波国語辞典』の武士についての説明は「昔、軍事に携わった階級の人」となっている。ここの階級は、上述した『大辞林』の後者の規定にある「職業」だけを基準にしぼった表現である。武を行う者、武を以って職業とするという観点から、武士は一つのまとまった社会集団と見なすことができる。

しかし、武士には発生当初から、源平出身の者もあれば、地方出身の者もある。そして、主人もあれば従者もある。武士政権ができてから、身分の格差がますます開き、とても一つや二つの階級で分けられるものではない。いわゆる「武士道」はまさにそのときに唱えられ、精神論のもとで、実際いくつもの階級の相を呈した武士を一つにまとめようとしたものといえる。

なぜ新撰組の近藤、土方らが武士よりも武士らしいと見なされるか。それは、彼らが幕末の動乱期に、平安末期の判官義経と同様、京都の治安を守るため、大いに威力を発揮した悲劇的な英雄として描かれているからであった。判官つまり警察は武士の原点であり職能であるのだ。

本来、王権を守り、反逆を鎮める判官は、民衆の対立側にある統治者側の人間である。しかしながら、判官という好適な位置にいた者が、民衆の暮らしに直結する社会治安に大いに威力を振い、民衆を怯えさせる朝敵をやっつけたがゆえ、民衆から拍手喝采を博すことができた。それに、大きな功績を挙げたにも関わらず、現体制に否定され、敗れて惨い最期を遂げた者なら、民衆から同情を集め、英雄視されたわけである。

そして、安定平和期に、権力の驕りに、武士本来のもつべき武を以て行動し、抑圧された庶民の気持ちをすかさずさせた赤穂浪士は、まさに人民のための「人民警察」であった。

静思するに、物語の中で、警察職を求める武士、警察として活躍する武士、といった武士が描かれるのもそのような武士が求められているからであった。ここの武士は英雄という言葉に置き換えてもよいであろう。

注

- (1) 武士が嫌い人もいる。たとえば、山田邦和氏は彼の著書に「わたしは武士がきらいだ。武士道は人殺しと自己破壊の哲学だし、幕府とは広域暴力団が組織化されたものだと思っている」(『京都 アンビバレンス』保育社カラーボックス、一九九四年)と述べている。日本の史学界において、「現代日本人のイメージする武士がその実像とは程遠く、実は近世に観念化され、明治以後、国家主義の教育のなかで、民主レベルまでに定着したものであるという事実は客観化しておく必要がある」(野口実『武家の棟梁の条件』中公新書一二七、一九九四年)という意見はある。本論の趣旨により、以上の意見について論ずることはしない。
- (2) 岩波日本古典文学大系31、一九六一年、p.68。
- (3) 上掲書 p.95。
- (4) 上掲書に収められた古活字本 p.380。なお p.325には、崇徳院軍については、「……左衛門佐宗康・勘解由次官助憲・桃園蔵人頼綱・下野判官代正弘・其子左衛門太輔家弘・右衛門太夫頼弘・大炊助度弘・右兵衛尉時弘・文童生康弘・中宮侍長光弘・左衛門尉盛弘・平馬助忠正・其子院蔵人長盛・次男皇后宮侍長忠綱・三男左大臣勾当正綱・四男平九郎通正・村上判官代基国・六条判官為義・左衛門尉頼賢を始として、父子七人、都合其勢一千余騎とぞしるしたる」と書いてある。
- (5) 米谷豊之祐「源為義 其の家人・郎従の結集・把持―武家政権樹立前後における武士団と棟梁の苦悩」『院政期軍事・警察史拾遺』近代文藝社、一九九三年、p.121。
- (6) 四部官とは長官(かみ)、次官(すけ)、判官(じょう)、主典(さかん)である。和田英松氏『官職要解』(所功校訂、講談社学術文庫六二二、昭和五八年、p.42)によれば「長官は役所を総べ掌り、次官はこれを補佐し、判官は役所内を糾判し、書類を審査し、稽失を勘え、主典は事をうけて登録し、書類案文を勘え作り、公文をよむのである。
- (7) 『保元・平治の乱』教育社歴史新書(日本史) 23、一九七九年、p.33。検非違使のほか、武士が勤める部門は衛門府、兵衛府、馬寮、蔵人所滝口、そして院の下北面などがある。
- (8) 『義経伝説―歴史の虚実―』中公新書、一九六六年、p.164。
- (9) 筆者は、一昨年一〇月に北京日本研究センター設立二〇周年記念国際シンポジウムで、また今年八月に成都で開かれた第一〇回日本文学シンポジウムで、研究発表をする際、このような意見を述べた。

- (10) 「日本・判官びいき考」、別冊歴史読本第一一巻第六号『源義経のすべて』所載、新人物往来社、一九八六年九月。
- (11) 前掲高橋著書、p. 43。
- (12) 前掲山田論文。
- (13) 和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』上、岩波文庫青八―一、一九四〇年、p. 23。
- (14) 上掲書、p. 42。
- (15) 童門冬二『真説・赤穂事件』（日本放送出版協会、一九九八年）によれば、大石はもともと重視しているのが討ち入りの理論付けである。わざわざ中国の『礼記』にある「父の仇」を「君父の仇」にかけ、「主人の恨みを家臣の恨みとして引き継ぐ」という大義名分を掲げた。しかも、それ以上「憂国の情」という大きな志を抱いていた。また実際、その大志を「私怨を晴らす」という小さな容器に押しこむという戦術をとった。
- (16) 「九・一一事件」のニュースを聞いて「さまを見ろ」というような罵詈雑言を吐く中国人がいたと聞いたことがある。その気持ちは、決してテロ行為を支持するのではなく、世界一の超大国アメリカに対する妬みであると解されよう。
- (17) 原文は中国語で書かれ、題は「文学和日本的国民性之漫談」、著者は呉民氏。登載雑誌は日本にいる中国人研究者による中国社会科学研究会が出した雑誌『東瀛求索』創刊号（一九八七年六月）p. 168-169。文中の引用は筆者による邦訳である。原文は次の通り、

1. 战前国民同的歇斯底里情绪，把日本文学拖向深渊。

……

日本有许多艺术家用各种艺术手段去渲染过发生在十七世纪后期的“四十七个浪人”事件。……这个真实的事件由于表现了封建社会中国日本武士的一种理想，因而不仅被改写成小说、电影、戏剧，在日本轰动一时，而且也成为日本武士道精神中的一种为理想献身的最为辉煌的体现方式而广为传播。日本社会长期以来封闭状态和近八百年的军国传统，由于受到了这种武士道精神的影响和刺激，使日本民族本来就存在着的狭隘封闭的感情色彩中，又增添了一种近似歇斯底里的狂热，以致于使十八世纪以后的日本，一直在动荡和不安之中。

拙論の趣旨から少し離れるが、この中国人研究者の論点を正確に把握するために、ここでは、当該論文の他の箇所、とりわけ三島由紀夫に関する論述からも若干引用することにする。

三島由紀夫は『金閣寺』という作品を世に問って高い評価を受け、一躍して日本文壇においてもっとも注目される作家となった。その最重要理由は、彼が日本国民の狭隘的心理を視角にして人間と自然の関係を捉えているのである。(原文：「三島由紀夫的《金閣寺》、这篇小説之所以会获得成功，并从此一跃而成为日本文坛最引人注目目的作家，关键的是他以日本国民的一种狭隘的心理作为视角，来看待人和自然的关系。」)

この小説の中に見られる三島由紀夫の独特な美学は、日本民族がもっている狭隘的で利己的な国民性と非理性的な復讐感情を余すところなく表している。(原文：「三島由紀夫在这篇小説中所表现出来的独特的美学观，充分表达了日本民族中的那种狭隘自私的国民性和民族中的那种非理性的复仇感。」)

三島由紀夫は死んだ。しかし、彼はわれわれに数多くの、さまざまな色彩を帯びた作品を残してくれた。これらの作品は、後世の人にとって、日本人の国民性と美学に関する研究において非常に価値のあるものである。なぜならば、三島由紀夫自身がこのような国民性を体現しているもっとも典型的な日本人であるからだ。彼の作品もこのような国民精神を体現している。これは日本に関する謎めいた難題である。実際、多くの日本人がこの難題に直視しながら、軽視ないし無視する人さえもいる。しかし、三島由紀夫は彼の大量の作品を以て、そして彼の美学や人生哲学のラスト表現方法——日本の伝統的な切腹自殺を以て、世間にこの難題の存在を示している。日本に関するこの難題は、今世紀のうちにとても解決できそうもないと断言できる。(原文：「三島由紀夫死了，但是，他为我们留下了大量的有着各种色彩的作品和一个值得后人去研究，去探讨关于日本国民性和美学原理这个主题。因为，三岛由紀夫本身就是一个具有着那种国民性的最为典型的日本人，他的作品本身所体现的也就是那么一种国民精神。这是日本的忧结，尽管很多日本人不愿意去正视它，甚至于蔑视它或者完全去否认它，但是，三岛由紀夫却以他的大量作品的本身，以及他美学观和人生哲学的最后一种体现方式——日本传统的剖腹自杀来向世人证明日本的那种忧结。可以断言，日本的这种忧结，就是在本世纪末以前也是难以解开的。」)

(18) 「明治維新の再評価・新撰組新論」、「中央公論」一九六二年四月号所載。

(19) 「司馬遼太郎の世界 新撰組血風録・幕末——幕末の墓碑銘——」『司馬遼太郎全集』第7巻所載、文芸春秋、一九七一年、p. 543。

(20) 「新撰組「服部之総全集7・開国」所収、福村出版、一九七三年、p. 63。

(21) 『司馬遼太郎全集6』所収、文芸春秋、一九七一年、p. 126。

(22) (18) 掲論文。

(23) 中国文化大革命の嵐の中で、わが青春を送った筆者は、新撰組の話をする、いつも紅衛兵とダブって見える。むしろ紅衛兵の規模がずっと大きいから、もう少し厳密に言えばその初期に北京にあった紅衛兵西城糾察隊と彷彿させる。また、近藤や土方は、いわゆる五大学生領袖である聶元梓（北京大学）、蒯大富（清華大学）、韓愛晶（北京航空学院）、譚厚蘭（北京師範大学）、王大賓（北京地質学院）に似ている。この五人はほとんど農村出身で、いきなり毛沢東や周恩來の直参になり（肩書きは北京市大学紅衛兵代表大会核心組メンバー、北京市革命委員会常務委員）、武闘の先兵として振舞った。文革後、譚が病氣死亡で刑事訴追を免れられたが、他の四人はみな裁判を受け刑に服した。

(24) 『軍記と王権のイデオロギー』翰林書房、二〇〇五年、p. 40。

(25) 「燕青の芸 義経の芸」『古典遺産』五〇号、二〇〇〇年。

(26) ただ、大陸国である中国は日本と違って、対外的な戦争が多く、そこで活躍した「民族英雄」と呼ばれるヒーローもいる。南宋末期の岳家軍のリーダーである岳飛はそうであった『説岳全伝』。そして北宋初期の楊家将もそのイメージが強い（『楊家府演義』）。

